国立映画アーカイブ
National Film Archive of Japan

プレスリリース
2022年10月

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)記念
「[上映と講演]戦前日本の映画検閲 ―内務省 切除フィルムからみる―」オンライン公開のおしらせ

公開コンテンツ

「サイレント・カット場面集 邦画」

「サイレント・カット場面集 洋画」

『落花の舞』[前・中・後篇]検閲切除場面(サイレント・カット場面集 邦画」より抜粋・編集)

加藤厚子氏講演「映画検閲再考―歴史資料としての切除フィルム―」採録

いつもお世話になっております。 国立映画アーカイブでは、本年の**「ユネスコ『世界視聴覚遺産の日』記念特別イベント 「戦前日本の映画検閲―内務省 切除フィルムからみる―」**(10月15日開催)**にて初上映しました、日本の映画検閲で切除されたシーンの断片集と、当日行われた加藤厚子氏の講演「映画検閲再考―歴史資料としての切除フィルム―」採録を、**ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)の本日、**オンラインで公開**いたしました。

公開した断片集のフィルムは、1988 年に寄贈された鳥羽幸信コレクションの中の、35mm フィルム「サイレント・カット場面集 邦画」(10分、16fps)と「サイレント・カット場面集 洋画」(14分、16fps)の2本。これらは、1925年から1928 年の間に内務省警補局の映画検閲でカットされた断片集と推定され、その断片の多くが、現在では"ロスト・フィルム"となっている"失われた作品"であることがわかりました。

なかでも「サイレント・カット場面集 邦画」には、日本映画史上、検閲問題で記録に残る**『日輪』(1925 年、マキノ=聯合、衣笠貞之助)や、日本初の映画スター尾上松之助の出演作で新機軸を打ち出した時代劇『落花の舞』(1925 年、池田富保)**などが含まれていることが判明。**本篇のフィルムが失われてしまった現在、公開当時は検閲でカットされたために見ることがかなわなかった場面のみが、90年以上の時を経て鮮烈に甦り、戦前日本の映画検閲の様相と共に、日本映画の知られざる魅力を明らかにします。**

公開コンテンツの見どころ
・多くの"失われた映画"の一部の映像が、検閲切除された場面によって甦ります。
・大正末期から昭和初期の映画検閲で最も多く切除対象となった「残酷」「風俗」の様相が明らかになります。
・切除フィルムの作品調査と講演採録とあわせて、戦前日本の映画検閲の多面的な考察が可能になります。
・切除フィルムに多数入っていた『落花の舞』を通しで見ることで、日本映画の新たな魅力を発見します。

ユネスコ「世界の記憶」30 周年にあたる本年、歴史的かつ文化的遺産である映画・映像のアーカイブや記録遺産を保護する活動への理解を深める取り組みとしても、周知のご協力を賜りますと幸いです。

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念 「[上映と講演]戦前日本の映画検閲 ―内務省 切除フィルムからみる―」オンライン公開
https://www.nfaj.go.jp/exhibition/unesco2022/#section1-5 **から、以下をご覧いただけます。**

◎NFAJ YouTube チャンネルにて

①「サイレント・カット場面集 邦画」(10分、16fps)1925～1927年頃の公開作の切除場面

②「サイレント・カット場面集 洋画」(14分、16fps)1925～1928年頃の日本公開作の切除場面

③『落花の舞』[前・中・後篇](1925年、日活、池田富保)切除場面4分強(「サイレント・カット場面集 邦画」より抜粋・編集)

◎「サイレント・カット場面集 邦画」および「サイレント・カット場面集 洋画」作品リスト

◎加藤厚子氏講演「映画検閲再考―歴史資料としての切除フィルム―」採録

【講師】学習院女子大学非常勤講師。専門は日本近現代史(戦前・戦中の映画産業と映画統制)。著書に『総動員体制と映画』(新曜社、2003年)、復刻監修『社史で見る日本経済史』シリーズ(ゆまに書房、2015年)の他、論文多数あり。

参考:10月15日開催イベント https://www.nfaj.go.jp/exhibition/unesco2022/

「サイレント・カット場面集 邦画」および「サイレント・カット場面集 洋画」の一部

	『日輪』(1925 年、マキノ=聯合、衣笠貞之助) 市川八百蔵(訶和郎) ●切除理由:「立木ニ吊リ下ゲラレタル訶和郎ノ半身場面並ニ第三字幕「卑彌呼」切除一米(残酷)」 原作は卑弥呼を描いた横光利一の小説で、市川猿之助ら春秋座が出演。卑弥呼が皇室の先祖と誤解を招く恐れありとして、検閲前に改変されたため、切除理由は「残酷」のみとなった。
	『蓬莱島』(1925 年、帝キネ、古海卓二) 藤間林太郎(速見六郎) ●切除理由:「鮮血ノ滴ル場面短縮四米(残酷)」 1925年5月23日に兵庫県但馬地方北部で発生した「北但大震災」を背景とした物語。 藤間林太郎は、当時帝国キネマを代表するスターとして活躍。女義太夫の初代竹本素行を母に持つ役者一家で、藤田まことの父。
	『都会の呪咀』(1926 年、東亜キネマ、井手錦之助) 左から、露原桔梗(安子)、石川秀道(勝彌) ●切除理由:「勝彌ト安子トノ接吻切除五米(風俗)」 郷里の牧場で働いていた大卒の勝彌が、都会で就職し、職場のタイピスト・安子をめぐる恋の駆け引きに巻き込まれるが、安子一家を伴って郷里の牧場へ帰る、アクション・コメディ。露原桔梗は、のちに俳人・稲垣きくのとして活躍した。切除理由は「接吻」と記されたが、この映像のように「接吻の比喩」でも切除された事例は多い。
 	『落花の舞』[中篇](1925 年、日活、池田富保) 左から、尾上松之助(清水次郎長)、小栗武雄(仙右衛門) ●切除理由:「死骸ニ血糊使用ノ場面短縮二〇米(残酷)」 朝日新聞連載小説で人気を博した前田曙山の『落花の舞』を、東亜マキノと日活の 2 社“競作”で話題になった作品。リアルな演技と殺陣で新機軸の松之助映画としても注目された。知られざる松之助映画の魅力を明らかにする貴重な断片。 **『落花の舞』[後篇](1925 年、日活、池田富保)** 左から、酒井米子(お絹)、沢村春子(磯江) ●切除理由:「お絹ト磯江ノ格闘ノ場面短縮六・〇九米(公安及風俗)」 酒井米子は、日活の大スター。この雨中の乱闘シーンは、撮影終了後に二人とも倒れ、酒井は昏睡状態に陥ったと報道された。切除理由が「残酷」ではなく、「公安及風俗」であるのは、女優の乱闘シーンゆえと思われる。
	『大山鳴動』(1925 年、アメリカ、ヴィクター・シャーツィンガー) マッジ・ベラミー(アゼリア)、ザス・ピッツ(マンデー)、レスリー・フェントン(サム) ●切除理由:「「アゼリア」カ川中ニテ洗濯ヲナス場面切除三七米(風俗)」 「「サム」カ川中ニテ「アゼリア」ヲ抱キ上ケ接吻スル場面及其間ニ於ケル第一、二、三各字幕並ニ之ニ続ク「マンデー」ガ川中ニ立チテ大腿部ヲ露出シ男ヲ誘惑セントスル場面及其間ニ於ケル第四、五各字幕切除一二九米(風俗)」 ＊「マンデー」は「アゼリア」の誤記と思われる。 原題は Thunder Mountain。ケンタッキー州のサンダー・マウンティンに、真面目なサムと元サーカスの花形娘アゼリアが、学校を建てようとする物語。

【本件に関するお問い合わせ】 国立映画アーカイブ ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント担当(冨田・玉田・星)
電話:03-3561-0823／FAX:03-3561-0830／E-mail:pr@nfaj.go.jp